

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になり、大切な人の死が縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。それは、悲しみを乗り越えない生き方であり、悲しみを包み込んだ人として生きることだと思っています。

三 七 日

1. 仏は存在するか？

大乘仏教圏の多くでは得度(とくど)をして僧侶になります。得度とは、本来、此岸から彼岸に渡ることで、仏になることです。だから、「度」と称することもあります。

最近、得度をして間もない友人から質問を受けました。「お参りをしているとき、本当に仏さんがいるのとお参りをしているのか？」と。

私も同じような思いを持ちました。得度をしたのだから、お坊さん

です。お参りのお同行(どうぎょう)の先頭に座ってお経をあげるのです。後ろに座っている人から、「本当に仏様はいるのですか？」と問いかけられたらどうしよう、と思いました。声に出して問われなくても、無言で問われているような気がしていました。

この質問に対する今の私の答えは、「存在すると思います」です。

物理的な証拠を示すことはできませんが、私はその存在を信じていま

す。しかし、友人の質問は、どうすれば存在するなんて思えるのかと言うことです。

私は、「御門徒さんの所に行って、お参りをさせてもらうことです」と答えになっていないような返答をします。その理由は、浄土真宗が在家仏教という特質を持っているからだと言うのです。

2. 親鸞聖人と家族

ここで浄土真宗の特質などと言ったのですから、開祖の親鸞聖人の生涯を簡単に紹介しておきます。

親鸞聖人は、平安時代末期から鎌倉時代前期に生きた人です。親鸞聖人は九歳で、天台宗で出家得度をするので、九歳ですから、天台宗の小僧さんになったのです。私は九歳の少年が一念発起して、仏門を叩いたとは思いません。斜陽貴族の息子として生まれ、母親は消息不明で、父親は政変に荷担して失脚と言うのですから、育てる人がいなくなったので、お寺の小僧さんにされたのだと思います。小僧さんになれば死なずにすむ、と言うのが実情ではなかったかと思えます。それだけに、九歳の少年は、不安であったろうし、

ずいぶんと寂しかったろうと想像します。

親鸞聖人が比叡山を下りるのは、二十九歳の時です。当時、京都の町で念仏の教えを説いていた法然聖人の弟子になったのです。親鸞聖人は生涯、法然聖人のことを師としてだけでなく、親のような存在として思ったそうです。同じく法然聖人の弟子であった恵信尼という女性と恋愛関係になり、法然聖人の仲介で結婚をしたのです。家族ができたのです。つまり出家ではなくなったのです。出家とは、家族を煩惱の対象と見なす、すなわち仏道を邁進するのに家族をブレーキと考えるのです。だから家族を捨てることです。

結婚を三十代前半頃と考えれば、四十代後半から五十代は、子育ての忙しかった頃でしょう。この二人の間に五人の子供があったそうです。子育ての忙しさは五十代まで続いたでしょう。この時期、親鸞聖人の主著『教行信証』の執筆中であり、盛んに布教活動をした時代です。忙殺されるように生活をする時代は、振り返ってみれば人生の最もいい時代かもしれません。幸せとは、物質的にまた経済的にゆとりのある

状態ではないのかもしれませんが。この時代の親鸞聖人の行動半径は 30～40 キロメートルほどだったそうです。決して遠い距離ではありません。親鸞聖人は、遠くに出掛けなかったのです。家族の味を知らずに育った親鸞聖人にとっては、幸せだったのでしょうか。いそいそと家族の元に帰っていく姿が想像されます。

六十歳前後より、この夫婦は別に暮らします。親鸞聖人は末娘と京都で、奥様の恵信尼さんは他の子や孫と越後、今の上越市で暮らされます。なぜ二カ所に分かれて暮らすことになったかは、定かではありません。私は、この家族に何かショッキングな出来事があったのではないかとおもいます。

京都の長岡京市に光明寺という浄土宗の本山があります。このお寺に法然聖人のお墓があります。このお墓に、30センチ程の木彫りの童子の人形があるそうです。光明寺の言い伝えによると、この人形は親鸞聖人が置いて行かれたそうです。

この言い伝えが真実であるなら、親鸞聖人は誰か大切な方を亡くされたのではないかと想像します。それも、若い、あるいは幼い方ではな

かったのでしょうか。関東から京都に戻った親鸞聖人は、親のように慕っている師のお墓に参って、この人形を置いて行かれたのです。先に極楽浄土においてになる法然聖人に、後から行った自分の大切な誰かを、「どうかよろしくお願いします」と手を合わされた姿を想像します。

親鸞聖人は九十歳で亡くなるまで、晩年を京都で過ごされます。この間に親鸞聖人が関東の方々に書かれた手紙が残っています。その中に、自分が死んだら〇〇のことを気の毒に思って、よろしく申し上げます、という手紙があります。この〇〇というのは、覚信尼ではないかとも言われています。覚信尼とは、京都で自分の世話をしてくれている末娘です。自分の死後、娘のことを案ずるのは、とても自然な感情でしょう。家族というのは、その存在に幸せを感じながら、全員が永遠に生きることはできません。そこには必ず死が訪れます。それぞれが、送る気持ち、送られる気持ちを持つのです。この気持ちはとても大切なものです。自分以外の人を思いやるのです。この思いこそが、人と人のつながりであり、人と仏のつながりであ

ります。

私たちは、大切なつながりのある方が亡くなると、とても大きな悲しみに打たれます。その中で、大切な方が尊い仏となられたと思うとき、仏様とのお付き合いが始まるのだと思います。

ここで親鸞聖人の生涯を紹介しましたが、私は学者ではありませんので、それぞれの事象に対する検証もできません。この親鸞聖人の生涯を通して、人と人のつながりによる喜びや悲しみが、私たちが仏に出会う契機となればと思います。

3. 母の死

昨年の夏のことでした。御門徒の婦人からお寺に電話がかかってきました。受けたのは坊守(ぼうもり：住職の妻のこと)でした。「私はもういくらも生きられないので、後のことをよろしくお願いします」という話でした。

電話を終えた坊守は、すぐに病院に走ったそうです。その夜、私は坊守からその話を聞きました。そのご婦人はかなり重い肝臓疾患に見えたそうです。病室には、二十三歳と十三歳の姉妹とご主人のお兄さん

がいたそうです。ご主人は六年前に私がお葬式をしました。

一週間ほどして、そのお母さんは亡くなりました。悲しいお葬式でした。子供たちを正視できませんでした。子供たちは、涙を流していませんでした。子供たちが泣いていないのに、私が泣くわけにもいきません。子供を残していく母の気持ちを思うと、居たたまれませんでした。

七日参りは、子供たちと伯父さんの三人のお参りでした。二七日の頃だったと思います。子供たちが、まともに食事をしていないような気がしました。

「ご飯をちゃんと食べているの？」

「食べる気がしない」とお姉ちゃんが答えました。

「それはそうかもしれないけれど、無理にでも食べてね」と言って帰りました。お寺に戻ってから、

「手が空いている時にでも、行って彼女らを食事に連れ出してくれないか」と坊守に頼みました。

数日後、坊守は彼女らを食事に誘いました。どこに行こうかと、尋ねるとお姉ちゃんが、回転寿司と言ったそうです。お寿司を食べながら、お姉ちゃんが「お父さんが死んでから、

初めての外出です」って言ったそうです。

私は、彼女らのお父さんが亡くなってからお参りをする機会が多くなって、この家の経済状態を想像していました。かなり厳しい生活をしていることは分かっていました。姉は、病院にかかることが多く、母親がよく連れて行きました。しかし、この経済状態ですから、母親は自分の病状には目を閉ざしたのかもしれない。多くの親がそうであるように、自分の病気は後回しです。

私は、四十九日の法要で彼女らに話しました。

「あなたたちは、お父さんが亡くなってから、お母さんと一緒にとても苦勞をしたね。今回、お母さんが亡くなって、苦勞はもっと大きくなるだろうと思います。いろんな人々が助けてくれるかもしれないけれど、やっぱりたくさん苦勞をします。」

世間では、仏などいないと言う人もあります。けれどもあなたたちには、仏は居るのです。あなたたちは、

お母さんの病室に時間が許す限り通いました。お母さんが、どんな気持ちで亡くなったかを知っているでしょう。あなたたちのことを心配して亡くなったでしょう。あなたたちのことを思っているのは、お母さんだけではなく、お父さんもあなたたちのことをずっと思っているのです。お父さんも、お母さんもあなたの方のことを、ずっとずっと思っているのです。

この思いこそがあなた方の仏であると、私は思います。いつも私は思われていると感じて生きて下さい。それが仏と共に生きることであり、仏によって育てられるという生き方だと思います」

4. 仏の存在

私は、坊さんとして人々の悲しみのお裾分けを頂きます。その悲しみは、単なる悲しみではなく、とてつもなく大きな教えを含んでいます。私は、お参りさせて頂く中で、仏の存在を共に感じさせてもらうのです。